

学生・教員が共に成長する初年次教育の取組

－「SIH道場～アクティブ・ラーニング～」の実施とその成果－

徳島大学

向井将馬・塩川奈々美・吉田博・川野卓二

1 背景

本学では、文部科学省大学教育再生加速プログラム（AP）テーマI「アクティブ・ラーニング」に採択され、2015年から全学部・学科1単位必修の科目として「SIH道場～アクティブ・ラーニング入門～（以下、SIH道場）」を開講している。SIH道場は1年次前期に開講され、各プログラムにおいて、i：専門分野の早期体験、ii：ラーニングスキル（文章力・プレゼンテーション力・協働力）の修得、iii：学修の振り返り、これら3つの目標が設定されている。また、授業を実施する教員はSIH道場をOJT型のFDとし、i：実践を通じアクティブ・ラーニングを実質化、ii：ルーブリック評価、反転授業等の修得、iii：教育経験の振り返り、を目指し、これまでに延べ1,000人以上の教員がSIH道場を担当した。

本発表では、SIH道場受講学生の感想や意見を踏まえつつ、これまでに蓄積されたSIH道場に関する学生アンケート・教員アンケートの結果に基づきSIH道場の取組の成果について報告を行う。アクティブ・ラーニングの普及に関する成果や課題を明らかにするとともに、2020年度以降のSIH道場実施に向けた改善について議論する機会としたい。

2 アクティブ・ラーニングの普及に向けた取組

SIH道場開講以来、従来のFD活動に加え、アクティブ・ラーニングの普及に向けた様々な取組を行ってきた。ALの普及に向けた取組には、1.実践事例を知る機会を設ける、2.支援体制を整える、3.成果を示すことが重要であり⁽¹⁾、全学FDやワークショップを通じて「反転授業」「ポートフォリオ」「ルーブリック評価」等の教育手法モデルを推奨している。

3 アクティブ・ラーニング普及の成果と課題

学生アンケートの調査結果から、SIH道場の受講生は全年度を通じて85%前後の満足度を示しており、学生による評価の高さが窺える。また、受講前後の学生アンケートの結果を比較すると、SIH道場設計必須指標の4点についていずれも受講後における肯定的意見の増加が認められ、SIH道場の経験を通じて学生の意識が高まっていることが明らかとなった。また、教員アンケートの結果より「SIH道場の目標理解」「SIH道場の満足度」に関する肯定的意見の割合は初年度から上昇傾向を示した。事業開始時における本学教員のアクティブ・ラーニングに関する意識や実践できるティーチングスキルが5年をかけて大きく変化した結果であると言えよう。また、各年度で多少の増減は見られるものの「教員の教育経験の振り返り」以外では肯定的意見が事業開始時からの緩やかな上昇傾向を示しており、これまでのAP事業における取組の積み重ねによってアクティブ・ラーニングの教育文化の浸透が認められる。

4 今後の取組

過去5年間の取組を経て、SIH道場実施に関する各部局の運営体制は既に機能しており、AP事業補助金終了後となる2020年度より、各学部・学科へとそのマネジメントが移行する。新教務システムやBYOD（Bring Your Own Device）の制度が導入されるなど、本学における教育環境も変化を続けていることから、2020年度を本学におけるアクティブ・ラーニング文化の新たなスタート地点として位置付け、継続的な運営および支援を目指したい。

5 参考文献

- (1)佐藤浩章・中井俊樹・小島佐恵子・城間祥子・杉谷祐美子編（2016）『高等教育シリーズ171 大学のFD Q&A』pp.63-64、玉川大学出版部
- (2)「学生の学習を促進する授業事例カード」（最終アクセス2019年12月30日）
http://gakunai.tokushima-u.ac.jp/univ-only/jimukyoku/gakumubu/kikakushitu_a/index.html